

# Understanding Australian learners of Japanese

Chihiro Kinoshita Thomson

*University of New South Wales*

## Abstract

Australia is known to have a large number of learners of Japanese. The total number of learners, over 360,000, is only after those of South Korea and China. In a country of a small population of 22,000,000, one in 59 Australians is learning Japanese. Who are these learners? This paper attempts to draw a picture of Australian learners of Japanese using statistical data, reports, data arising from classroom teaching, surveys and interviews. The paper describes that 96% of the learners are in primary and secondary schools and some of them have negative experiences in Japanese classes offered as a part of required foreign language hours. Those who elect Japanese in later years may have commitment to Japanese, but some have reactive, rather than proactive, reasons to study Japanese such as that they do not have to write English essays in the Japanese courses. In universities, the majority of the learners are in introductory-level courses, and only 0.1% of all Australian learners can be considered as advanced and professional proficiency speakers of Japanese. A large number of learners are drawn to Japanese by popular cultures such as anime, manga, J-pop and drama. The paper argues that they 'consume' Japanese language study just as they 'consume' other popular culture icons such as the Miyazaki anime and Hello Kitty goods. In the hope that this knowledge about the learners of Japanese contributes to the improvement of the Australian Japanese language education, the paper proposes that firstly the language programs should incorporate popular culture into their curriculum, and secondly policy makers along with language teachers should collaborate in acting upon proposals made by recent reports such as the clear description of career paths for those proficient in Japanese.

# オーストラリアの日本語学習者像を探る

トムソン木下千尋

ニューサウスウェールズ大学

## はじめに

オーストラリアは日本語教育大国である。国際交流基金 2006 年調査によるとオーストラリアの日本語学習者数は 36 万人を超え（国際交流基金 2009）<sup>1)</sup>、韓国、中国に次いで世界 3 位で、この数は人口が 2200 万人の小国で 59 人に 1 人が日本語を学習していることになり、人口比では韓国に次いで世界 2 位となる。また、日本語はオーストラリアの第 1 外国語の位置にある。つまり、小中高校、大学で伝統的な学習言語のフランス語や、移民の言語のイタリア語やギリシャ語、隣国のインドネシア語を抜いて、日本語が最も多く学ばれている（Kretser and Spence-Brown 2010）。韓国のように日本が隣国でしかも両言語間の距離が近いわけでもなく、英語が公用語で外国語を学習しなくても国民が国際舞台で活躍できるこの国で、日本語がこれほどまで学ばれているのはどうしてだろうか。この 36 万人の日本語学習者とはいったいどんな人たちなのだろうか。本稿では、統計資料、報告書、アンケート調査、教室データ、インタビューをまとめ、オーストラリアの日本語学習者像を探って行きたい。また、学習者像をよりよく把握していくことで、今後のオーストラリアの日本語教育、および「日本語人材」の確保に役立つ方略を提案したい。

## 日本語学習者台頭の背景

多数のオーストラリア人が日本語を学習している背景には、日本が長年にわたってオーストラリアの優良な貿易パートナーで、最大輸出先である<sup>2)</sup>ことを含めた経済面での国益、また、太平洋地域での協力体制のもたらす戦略的な国益のため、国が国策として日本語教育を推進してきた経緯がある。1970 年代に多文化政策に転換したオーストラリアは、ヨーロッパの遠い親戚より近くのアジア諸国と向き合うアジア太平洋国家として生まれ変わり、80

1) 本稿中、世界の学習者数に関する統計は全て国際交流基金の調査に基づく情報を以下のサイトから取ったものである。 <http://www.jpfa.go.jp/japanese/survey/area.html>

2) 一時中国に抜かれたそうだが、現時点では 1 位に返り咲いたと聞いている。統計資料は Australian Bureau of Statistics から得ることができる。

年代、90年代には言語政策もアジア言語を国の「資源」と見なすようになる。その中で日本語は国家の12優先言語の1つ（「オーストラリアの言語・識字政策」1991）、かつ、アジアの4優先言語の1つ（「オーストラリアの学校におけるアジア語・アジア学習促進計画」1994）に指定される（嶋津 2008）。

この政策の実現を支えてきたのが、連邦政府、州政府、加えて日本政府からの支援である。カリキュラム開発や教師養成などに力が入れられ、日本語プログラムの質が上がったこと、リーダーとなる教師陣が育ったことなどがさらに日本語プログラムを育て、学習者を増やしていった<sup>3)</sup>（Kretser and Spence-Brown 2010）。

しかし、日本語学習者の台頭はこれだけでは説明しきれないだろう。オーストラリアと日本の友好関係は政治、経済のレベルに留まらない。2006年に日豪友好協力基本条約締結30周年を迎え、2009年の時点で日本とオーストラリア間の姉妹自治体提携は108件（102市区町・6都府県）（自治体国際化協会 2009）で、この姉妹都市の数に代表されるような文化交流のレベルでも、個人のレベルでも多種多様な国際交流が日常的に行われている。よく日豪の関係は、長年連れ添った夫婦に例えられる。つまり、特に胸躍するようなことはないが、安定していて堅実な関係であると言われる。アンダーソンが述べているように、インドネシア語を話せないオーストラリア人がバリ島で休暇を過ごすのと同じ感覚で、日本語のできないオーストラリア人が北海道に行ってスキーを楽しんでいるし、オーストラリアの小学生が校庭でポケモンカードを交換している今、日本はオーストラリアにとって特別な国ではなく「普通」の国になった（アンダーソン 2009）と言える。日本語もオーストラリアの普通の学校でフランス語が学ばれるのと同じように学ばれ、学校に行ったら日本語が教えられているのは特別なことではない。

### オーストラリアで日本語を学ぶ子供たち

政策主導の日本語教育は、結果として政策が届く範囲、つまり、学校教育の中の年少者の日本語教育の発展をもたらした。オーストラリアの日本語教育で他国と比べて特出しているのは、学習者の96%が小中高生であるということだ。表1を見ると、同じ英語圏のアメリカ、カナダ、イギリスと比べて、オーストラリアは圧倒的に年少の学習者が多いことが分かる。実に35万人以上の子供たちが日本語を学習している。この35万人という数はオース

3) 国際交流基金の調査は3年ごとに行われているが、2003年調査をピークに2006年調査では学習者数が下降した。2003年度調査では37万人近かったので、3年間で1万6500人、4.5%の減少である。10年にわたる自由党政権で外国語に対する支援が打ち切られたことが原因の1つとしてあげられる。2009年調査の結果はまだ速報として仮に出されている段階で本稿には取り入れなかったが、小中高の学習者の減少が著しく、全体で25%の下降と出ていて、現場は危機感を覚えている。減少の理由については Kretser and Spence-Brown (2010), Northwood and Thomson (2010) などを参照されたい。

表1 全学習者数の中で小中高校生が占める割合（国際交流基金 2006 年度調査）

国	全学習者数	小中高校生	割合
オーストラリア	366,165	352,629	96%
アメリカ	119,989	58,181	49%
カナダ	23,834	11,043	46%
イギリス	14,928	8,510	57%

トラリアの小中高校生総数の 10% 強を占め、学校では 10 人に 1 人が日本語を習っていることになる<sup>4)</sup>。

小中高校では、オーストラリアの日本語教育が日本の英語教育に近くなってきていると言える。というのは、オーストラリアの生徒たちは自分たちがどうしても日本語を勉強したくて日本語クラスに行っているのではなく、政府の設定した外国語履修の規定の中、たまたま自分の学校にあったのが日本語で、必修で外国語をとらなければならないから授業を受けていることが多い。

オーストラリアでは州によって外国語教科の規定が少しずつ違い、一概には言えないが、例えばニューサウスウェールズ州では、外国語が 7 年生から 10 年生の間に 100 時間必修と規定されている<sup>5)</sup> (Liddicoat, et al. 2007)。ニューサウスウェールズ州内のシドニーの 2 地域<sup>6)</sup>、比較的裕福な地域とされる東シドニー（市中心部を含む）の中等校（日本の中学校と高校の 6 年間に当たる）35 校と、経済力のない地域とされる西シドニーの中等校 51 校を School Choice というオーストラリアの学校の情報サイト<sup>7)</sup>で調べてみた。

表 2 からわかるように、外国語の選択肢をいくつもそろえられる余裕のある学校は西シドニー地域には少ない。たいてい 1 つか 2 つの外国語教科が提供されるに留まっている（86%）。裕福な私立校の多い東シドニー地域でも、1, 2 言語だけの学校が 16 校（46%）ある。2 つ外国語があっても、時間割や教師の持ち時間の関係から、生徒には選択権がない場合も

表 2 シドニーの中等校の外国語教科数

	1 言語	2 言語	3 言語	4 言語	5 以上	合計
東シドニー	8(1)校	8(2)校	7(5)校	6(3)校	6(5)校	35(16)校
西シドニー	22(3)校	22(12)校	4(2)校	3(2)校	-	51(19)校
合計	30(4)校	30(14)校	11(7)校	9(5)校	6(5)校	86(35)校

( ) 内は日本語教科のある学校数

4) この数も一時より減少している。

5) 外国語が必修に指定されている州のなかでは、100 時間は少ない。

6) このサイトではシドニーは 9 地域に分けられている。

7) <http://www.schoolchoice.com.au/> 2010 年 11 月 1 日アクセス。

ある。つまり、中等校で外国語が必修の間に日本語を勉強している生徒たちは、特に日本が好きな子供たちというわけではなく、ごく普通のオーストラリア人の子供たちなのである。この環境下、Lo Bianco が指摘するように、日本語学習が負の体験になってしまっている子供たちが出始めている (Lo Bianco 2009)。まじめに勉強したい生徒もいるのに、どうしてもいいと思っている生徒が授業の邪魔をする、教室運営に英語が追いつかない日本語母語話者の先生がいて、生徒が先生の言っていることがわからない、非母語話者の先生の日本語力が低くて、折り紙や風呂敷などの紹介に終始している、初等レベルではカリキュラムが整備されていないことがあり、行き当たりばったりの授業が見られる、学校側が日本語プログラムを積極的に支援しないためプログラムが初級だけで終わってしまう、少人数の上級クラスは複合クラスになってしまうか、廃止になってしまうなど (Lo Bianco 2009, Liddicoat, et al. 2007, Kretser and Spence-Brown 2010 などより) の理由から、生徒たちの日本語学習が満足の行くものとして終わらない場合が少なからず存在する。

### 日本語を選択する生徒たち

中等校の学年が上がると外国語が選択科目となる。2008 年度中等校 6 年間の全国の日本語履修者数は 126,748 人だった。これを 6 で割って 1 学年の平均を出すと 21,125 人であるはずなのに、最終学年である 12 年生で実際に日本語を履修した生徒は 4,969 人だった (Kretser and Spence-Brown 2010)。たいていの州で外国語の必修期間が 10 年生で終わり 11 年生から選択科目となることにより、10 年生から 11 年生への移行で履修者数が大幅に減る。外国語を選択すると大学入試と連動している卒業資格試験の試験科目ともなるため、ここで履修者が大きく減少するのは日本語に限らずすべての外国語教科に共通している。減少の理由には、難しいとされる外国語を試験科目とすることで、総合得点が低くなってしまいう可能性があると思われること、外国語は美術やスポーツなど点が取りやすいとされている教科と競合して選択科目になっていること、両親や学校のアドバイザーに外国語教科は将来の就職につながらないという認識を補強されることなどが挙げられる (Liddicoat, et al. 2007)。この状況下、11 年生、12 年生で日本語を履修し日本語を受験の試験科目とする生徒たちは、試験科目として難しいとされている日本語をあえて選択しているいわゆるまじめな生徒たちと考えることができるのではないか。

ここで、調査プロジェクトを 1 つ紹介したい。筆者らの研究チームはニューサウスウェールズ州で日本語を勉強中、あるいは勉強していた中等校の 10, 11, 12 年生と大学生にアンケート調査を行って、学習者がなぜ日本語をやめてしまうかを調査している。調査 1 年目には、中等校、10 校の生徒 464 名、4 大学の大学生 164 名にアンケート調査を行い、加えて、14 名の大学生にフォーカスインタビューを行った。調査は進行中なので、ここでは暫定的

な報告になるが、学習者が日本語をやめる理由は、個人的、構造的、社会的な理由に分けられるようだ。個人的には、モチベーションが低い、学習習慣がないなどの理由、構造的には、上述したように学校に上級の日本語コースがない、大学の専攻のプログラムに外国語を入れる余地がないなど、社会的には、日本語が就職に結びつく道が見えない、あるいは、日本語はアジア系でない学習者には難しすぎるという固定観念などが理由だ (Northwood and Thomson 2010)。

調査で中等校を訪れたとき気づいたのは、生徒たちがほとんどアジア系だということだ。2年目の調査で最近訪ねた3校では、計130人ほどの生徒たちと会ったが、外見から判断してアジア系でないと思われた生徒は5人ぐらいだったと記憶している。1年目の調査結果でも464人の回答者の中でアジア言語（広東語、北京語、韓国語、ベトナム語など）を話すと回答した生徒が318人いた。英語しか話さない回答者は132名で、英語と回答していてもオーストラリア生まれのアジア系オーストラリア人の場合もある。

アジア系の生徒の中にはオーストラリア生まれで2世、3世などの生徒、家族と一緒に移民してきた1世の生徒、加えて海外から来ている留学生<sup>8)</sup>がいる。年齢が高くなってから移民してきた1世の生徒や留学生は英語で受験する科目を避けて日本語を履修している可能性がある。母国の漢字圏で教育を受けたことのある生徒や、オーストラリアで育っても中国人コミュニティの補習校に通っていた生徒は漢字がわかるので、また韓国語母語の生徒は日本語と韓国語が似ているので日本語科目はそれほど難しくないと考えて履修している。一般的にアジア系の生徒たちは日本のポピュラーカルチャー、マンガ、アニメなどに接して育ってきていて（詳細は後述）、日本語に興味があるだけでなく、日本語は身近である。そうすると、前述の「日本語をあえて選択しているいわゆるまじめな生徒たち」という記述が全員に当てはまるわけではないと考えた方がいいだろう。日本語は簡単そうだし、英語でレポートを書かなくてもいいし、授業でマンガも見られるし、というようなむしろ消極的な理由で日本語を選択している生徒たちもかなりいると考えられる。もちろん積極的な理由で一生涯日本語を勉強して高校を卒業し、大学でも日本語を続ける生徒が多々いることも事実である。

1つ留意しておかなければならないのは、調査の行われているニューサウスウェールズ州は、州都がシドニーでオーストラリアへの移民の玄関口となっていて、特に都市部はアジア系も含めた最近の移民が多いという事実があることだ。オーストラリア全体に同じような傾向があることは推測できるが、他州にもニューサウスウェールズ州と同じレベルの強い傾向があると言い切ることはいえない。

---

8) 英語の力をつけるために韓国、台湾などからオーストラリアの中学、高校に留学してきている生徒達がいる。

## 大学で日本語を学ぶ学生たち

オーストラリアは公共教育の制度内の日本語教育が発達しているのので、民間の日本語学校というのは微々たるものである。小中高校以外の4%の学習者はほとんど大学を筆頭とした高等教育機関で日本語を履修している。

大学の日本語学習者の特徴は大半が初級に集中していることである。筆者が勤務するニューサウスウェールズ大学は、オーストラリアで優良とされる8大学（GO8）の1つで、オーストラリア最大級の日本語プログラムを擁している。1例として2010年の1学期の履修者数を見ると、全体数は800人ほどだが、その半数強が初心者コースに在籍している。この傾向はほとんどの大学で見られるようだ。

もう1つの特徴は、小中高校の日本語カリキュラムが充実していることから、日本語を数年学んでから大学の日本語プログラムに中級から入ってくる学生がいることだ。この学生たちが日本語あるいは日本研究を専攻とし、大学生活の途中で半年、あるいは1年日本で交換留学を経験し、戻ってからもきちんと勉強して卒業していくと、国際舞台で日本語が使える日本語話者が育つ。

## 大学で日本語を始める初級の学生たち

まず、初級の学生たちだが、非常に多様である。オーストラリアの大学には海外からの留学生が非常に多い。特にニューサウスウェールズ大学の場合は、全学生の25%が海外からの留学生であり、そのほとんどが近隣アジア諸国からの学生である。また、現地の学生を含めても英語が家庭言語の学生は40%にすぎないと言われている。様々な言語を母語とする学生の集まりだ。加えて、日本語コースには中等校の場合と同様にアジア系の学生が多い。さらに一般教養の単位のために日本語を履修する学生が多いため、大学のほとんど全ての部門から学生が集まって来ていて、日本研究専攻の学生は少数派である。他大学でも外国語を一般教養の単位に認めるところでは同じような現象が起こっている。

1例として2010年度初級コース第1学期の学生簿を見てみると表3のような構成であった。履修者数上位3学部、商業経済学部、人文社会学部、理学部のプログラムの中では、日本研究が専攻できる<sup>9)</sup>が、1年目には専攻を特定しなくていいので、お試しコースとして履修していることも多い。工学部、芸術学部、建築学部、医学部、法学部では日本研究は専攻できないので、複合学位の学生以外は、一般教養の学生ということになる。

9) 人文社会学部では54単位のmajor、商業経済学部では48単位のmajor、理学部では36単位のminorができる。

表3 初級コースの学生の所属学部

商業経済学部*	162人
人文社会学部*	89人
理学部*	71人
工学部	71人
商業経済学部*・人文社会学部*#	15人
芸術学部	13人
建築学部	12人
人文社会学部*・教育学部*#	8人
人文社会学部*・工学部#	2人
商業経済学部*・理学部#	2人
医学部	2人
法学部	2人
理学部*・教育学部*#	1人
合計	453人

\* 日本研究が専攻できる

#2 学部の複合学位プログラム

続いて、筆者が同学で2007、2008、2009年に初級コースを担当したときにインフォーマルに集めた資料をもとに検討していく。1大学のデータなので汎用はできないが、傾向を垣間見ることはできる。この3年間は学年当初の初級コースの履修者数が360-380名程度だった<sup>10)</sup>。この大学では英国式の講義とチュートリアル方式を使用しているので、週の初めに大講堂で講義を行う。講義への出席の記録収集の一環として、学生に様々なことを書かせて提出させていた。これを集計したものが資料である。

表4は、2007年度の1学期1週目に、まだ何も日本語の勉強をしていない学生に知っている日本語の言葉を英語のアルファベットを使っていいから書くように指示して収集したものの集計である。英語のスペルで書いて

表4 学習者が日本語学習前に知っていた日本語の言葉 (2007年度)

分類	語数(件数)	上位3語とその件数	上位10語
食べ物 飲み物	34(137)	Sashimi 18; Sushi 16; Wasabi 12	1. Sashimi 18 2. Sushi 16 3. Konnichiwa 13 4. Arigatoo (gozaimasu) 13 5. Wasabi 12 6. Udon 10
挨拶 決まり文句	22(74)	Konnichiwa 13; Arigatoo (gozaimasu) 13; Ohayoo (gozaimasu) 13	6. Teriyaki 10 6. Raamen 10 6. Ohayoo (gozaimasu) 10 6. Kawaii 10
伝統文化のアイコン	22(50)	Kimono 6; Sensei 5; Sumoo 4	
形容詞	12(32)	Kawaii 10; Baka 5; Oishii 4;	
企業名	8(18)	Toyota 5; Mitsubishi 4; Honda 3	
地名	8(13)	Tookyoo 3; Oosaka 2; Nihon 2	
ポップカルチャーの アイコン	7(18)	Manga 7; Anime 5; Totoro 2	
その他の名詞	72(93)	Neko 6; Inu 4; Yuki 3; Tsunami 3	
その他	(7)		
合計	191(440)		

回答者数：270、回答数：440。

10) 2010年度の当初の履修者数は諸処の事情で480名に急増した。



きているので、筆者がローマ字に書き直した。シドニーは日本食が人気なので、食べ物類が上位にあがってくるのは予想できた。Sushi と Sashimi は 2008 年、2009 年度も同様に上位を占めた。挨拶や決まり文句はスペルがかなり怪しかったので、聞いて覚えたものと考えられる。日本のドラマなどを見て覚えたのではない。伝統文化のアイコンには、Samurai, Bushido, Ninja, Katana などが上がってきて、歴史や武道に興味があるのかと思ったらそうでもなく、コンピューターゲームに出てくるらしい。ということは伝統文化のアイコンとして分類するのではなく、ポップカルチャーのアイコンとして分類すべきだったのかもしれない。その他の名詞は 72 種類出てきてバラエティーがある。学生たちは日本語コースにやってくる前に既に様々な日本語の言葉を知っていることがわかる。

2 週目には知っている日本人名を書くように指示を出した。2007 年の結果を表 5 にまとめである。特筆すべきは浜崎あゆみが 2 位に大差をつけて 1 位に上がっていることで、この地位は 2008 年度も 2009 年度も揺るがなかった。初級コースの履修者には中等校生と同様アジア系が圧倒的に多いことから、浜崎あゆみがアジア諸国で活躍していることが窺える。筆者も浜崎あゆみなら知っているが、馴染みのない名前がいくつも挙げられていた。自分の知り合いの日本人の名前を書いているのかと思ったが、念のためインターネットで検索してみると、例えば、Shigeru Miyamoto というのは宮本茂で著名なゲームクリエイターで、Kaname Chidori というのは「恋風」というコミックの千鳥要というキャラクターであることがわかった。キャラクター名は 31 件も挙げられていて、生身の俳優名より多いことは、筆者には

表 5 学習者が知っていた日本人名 (2007 年度)

分類	人名数	上位 3 名とその件数	上位 10 名
歌手, ポップスター	37(134)	Ayumi Hamasaki 50 ; Hikaru Utada 17 ; Mika Nakashima 6	1. Ayumi Hamasaki 50
キャラクター名	31(39)	Naruto Uzumaki 5 ; Hajime Kindaichi 2 ; Kaname Chidori 2	2. Hikaru Utada 17 3. (Hidetoshi) Nakata 8
俳優, アイドル	23(36)	Ken Watanabe 6 ; Kyoko Fukada 4 ; Aya Ueto 4	3. Hayao Miyazaki 8 5. Mika Nakashima 6
アニメ, マンガ, ゲーム制作者	11(16)	Hayao Miyazaki 8 ; Osamu Tezuka 1 ; Shigeru Miyamoto 1	5. Ken Watanabe 6 7. Takuya Kimura 5
スポーツ選手	8(20)	(Hidetoshi) Nakata 8 ; Shunsuke Nakamura 3 ; Ichiro (Suzuki) 3	7. Naruto (Uzumaki) 5 7. Ken Hirai 5
その他の有名人	22(29)	(Akira) Kurosawa 4 ; Shinzo Abe 4 ; Musashi (Miyamoto) 2	7. Nagiko Fukada** 5
その他*	61(74)		
合計	193(348)		

回答者数：272, 回答数：348.

\*日本語の先生の名前を含む. \*\*このコースのコーディネーターの仮名

表6 学習者が知っていた日本の地名（2007年度）

分類	地名数	上位3地名とその件数	上位10地名	
都道府県	23	東京 44；大阪 41；京都 25	1. 東京	44
県庁所在地	9*	名古屋 18；札幌 11；横浜 7	2. 大阪	41
東京内の地名	10	渋谷 10；新宿 8；原宿 6	3. 北海道	27
地方	2	北海道 27；九州 3	4. 京都	25
その他	5	富士 8；成田 4；ニセコ 2	5. 広島	22
合計	49		6. 名古屋	18
			7. 長崎	15
			8. 沖縄	14
			9. 札幌	11
			10. 渋谷	10

回答者数：300，回答数：328。

\*都府県名と県庁所在地が同名の場合は都府県名に入れた。

驚きだった。Musashi Miyamoto（宮本武蔵）も実はその他の有名人ではなく、ゲームのキャラクターに分類すべきだったのかもしれない。

3週目には知っている日本の地名を書くように指示を出した。ちょうど平仮名を習い始めていて、平仮名で書くように指示したため、怪しい地名（「しんずく」＜新宿、「ほかいど」＜北海道など）が出てきたが、筆者が解釈できるものはとりあげて、それを表6に集計した。東京、大阪が上位なのは予想通りと言えるが、北海道が京都を抜いて3位に入っているのは、札幌、ニセコという地名からも推測できるように、オーストラリアの夏休みに北海道にスキーに行く若者が多いからだろう。24もの都道府県名が出てきたのは意外で、特に、山形、富山など知名度は低いのではないと思われる地名が挙がっている。これは多分、両県がニューサウスウェールズ州と姉妹都市関係にあるからだろう。先に述べたように日豪間には姉妹都市協定が数多く、相互訪問や若者のホームステイなど、様々な交流活動が恒常的に行われている。

4週目以降は毎週習う文型が使えるような質問に答えるように指示を出した。「毎日何を飲みますか」「暇なときどんなことをしますか」「誕生日に何が欲しいですか」「日本食のレストランで何を注文しますか」などの質問だ。初級だからあまり難しい質問はできないのだが、質問の答を見ていくと学生たちの生活や嗜好が分かってくる。もちろん、「大学にどうやって来ますか」という質問に「ヘリコプターで来ます」と回答するような学生もいたもので、学生の回答を全部真に受けてはいけない。この学生のように冗談を言って楽しんでいる場合もあれば、面倒だからか全部「すしを食べます」のバリエーション（「暇なときはすしを食べます」「誕生日にすしが食べたいです」「レストランでいつもすしを注文します」）で答えるような学生もいたし、また、自分が本当に言いたいことはまだ日本語力が足りずに表現できない場合、あるいは、今習った言葉が使ってみたくて、自分の本心ではないことを書く場合など理由はどうあれ、学生が書いてくるのが、完全に彼らの生活を反映していると

は言えない。それを受け止めた上で、学生の回答から学生像を描くと、学生たちは毎日水やコーヒーやミルクを飲み、週末には図書館に行って宿題をしたり、教会に行ったり、アルバイトをしたりする。暇があると映画に行ったり、本やマンガを読んだりするという。好きなことは食べ歩きやスポーツ、嫌いなことは朝起きること、誕生日には iPod やプレイステーションなど電子機器系のプレゼントが欲しくて、休暇には香港や日本に旅行したいと思っている。日本語の教科書には「酒を飲み過ぎて、二日酔いで頭が痛い」というような例文は出てこないで、学生が表現できることが限られているからなのか、それとも本当に品行方正なのかはわからないが、なんだかひどくまじめでお行儀がいい学生像だ。

以上から、ニューサウスウェールズ大学の初級の学生たちは、多様な文化背景を持ち、大学のすべての学部からやってきた多様な学生たちで、日本語学習を始める前に既に日本語の言葉や日本人の名前を知っている。学生たちの知識は、例えば本を読んで勉強してつけたというより、アニメ、マンガ、ドラマ、ゲームなどから得たり、姉妹都市やスキーに行っただけの交流から得たものが多いようである。1 大学のデータであるが、他の大都市の大学の学生像もこれに近いのではないと思われる。

## 上級の学生たち

中等校で5年間日本語を学習してきた学生、日本人学校の国際クラスに通っていた学生、高校時代日本に1年間留学していた学生など、様々な形で既に日本語の学習経験のある学生が大学に入ってくる。これらの学生は大学の中級レベルのクラスから勉強を始め、大学在学中に日本に留学するものも多い。特に優秀な学生はオナーズ (Honours) と呼ばれる名誉学位に残って日本語のデータを使った研究論文を書く。ニューサウスウェールズ大学に提出された最近のオナーズ論文のテーマは、ポップカルチャー関連ではアニメのファンについて、セーラームーンなどに代表される少女の商品化について、社会言語学関連では「ジャップ」という言葉について、「外人」という言葉について、社会文化関連ではオリンピックの日本代表ユニフォームについて、落語の出囃子について、教育関係では日本の理科教育について、日本における朝鮮学校についてなどがある。

初級の学生はポップカルチャーに知識や興味が集中しているようだが、上級になるとポップカルチャーだけでなく、自分が大学の専攻として勉強してきたことと日本への興味を組み合わせた関心の広がりを見せる。理学部との複合学位の学生は日本の理科教育の研究に取り組み、音楽と日本研究が複専攻の学生は落語の出囃子の研究をするといった具合だ。

先の調査プロジェクトで上級の学生に行ったフォーカスインタビューから伺えるのは、上級の学生たちは当初ポップカルチャーに引かれて日本語を始め、日本語との関係が徐々に変わってきていることだ。日本人の友達を作ったり、日本に旅行に行ったりしながら、日

本へそして日本語への興味を深めていき、上級で大学を卒業する頃には日本で就職したい、あるいはオーストラリアで日本語が使える仕事に就きたいと考えるようだ。実際にオーストラリアの外務省、日本の企業、団体などに勤める学生もいるし、卒業と同時に日本へ渡り、何らかの職に就く学生もいる。

しかし、残念なのは本当に上級と呼べるような学生は絶対的に少ないことだ。国際交流基金とオーストラリア・ジャパン・リサーチ・センターの2003年度調査(Japan Foundation and Australia-Japan Research Centre 2004)をもとに概算すると、上級と呼べる学生は全国で500人程度だ。これは総学習者数36万人の0.1%にすぎない。

### オーストラリアの日本語学習者像

オーストラリアは日本語教育大国である。学習者数だけを見るとすばらしい結果を出しているように見える。しかし、学習者は初等中等校に集中していて、特に低学年の必修外国語として日本語を履修している学習者の中には、日本語学習が負の体験になってしまう状況も見られる。選択科目として履修している学習者には日本語学習に積極的なものも多いが、英語でエッセーを書かなくていいなどの消極的な理由で履修している学習者がいることも確かだ。大学でも、大半の学習者は初級で終わってしまう。中等校で勉強してから大学で上級へ繋げる学習者は国際舞台で活躍できる日本語力を身につけるが、上級まで続けていく学習者はほんの一握りにすぎない。そして、学習者の日本語への興味を牽引しているのは、政府が唱える「資源」としての日本語の魅力ではなく、ポップカルチャーにアクセスするためのツールとしての日本語であることが多い。

学習者たちの多くは、ドラえもんのマンガを読み、セータームーンを見て育ち、すしを食べて、資生堂の化粧品を使い、キティーちゃんを携帯ストラップにつけて生活している。その「日本を消費する」(Stevens 2010)生活形態の1つに「日本語学習」が位置づけられるのではないかと思う。一昔前に日本で、英語学校や文化センターに行って英語を習うのが流行った。企業で英語が必要だからという実用に迫られた学習者とは別に、趣味で英語を習う人たちだ。同様にオーストラリアにおける日本語学習も、特に将来仕事で役に立つということではなく、今、現在、日本語を学習するという行動が、宮崎アニメを見る行動と横並びの「日本を消費する」生活形態の1つとなっているのだと思う。そして、学習した日本語を使って、日本のドラマを見たり、カラオケで歌ったりすることで、さらに日本を消費することになる。この消費行動は、学習者をさらに引きつける何かがあれば、飽きてしまった時点で終わってしまうことになる。

Kretser and Spence-Brown (2010) や Northwood and Thomson (2010) が問題視しているように、オーストラリアの日本語学習者の数はピーク時より減少しているし、上級まで続ける

学習者の数が圧倒的に少ない。学校教育における日本語プログラムへの支援体制を立て直すと同時に、初級の学習者が上級まで続けていけるような体制を、そして魅力的な日本語プログラムを作っていく必要があるだろう。それには、学習者の興味を引き、動機付けとなるポップカルチャーを上手にプログラムに取り入れることと同時に、ポップカルチャーから入ってきた学習者が上級まで残るべき理由が可視化される必要がある。2010年2月に日本の外務省とオーストラリアの外務省の代表が集い、キャンベラで行われた第3回日豪会議(Australia Japan Conference)<sup>11)</sup>の3つの議題の1つは日本語教育を通じて日豪間の人材交流の活性化を図ることだったが、会議が提出した報告書<sup>12)</sup>でも上級学習者のキャリアを支える支援の重要性がハイライトされている。日本語を使ったキャリアパス(職業の道筋)を明確にする、つまり、仕事でどのように日本語を生かしていけるかを、どのような仕事で日本語が必要とされているかを明文化していくことが必要だ。

## おわりに

オーストラリアの日本語教育がここまで育ってきたという成果は非常に立派なもので、その事実は揺るぎないものだと思っている。しかし、オーストラリアは日本との「長年の夫婦関係」や、日本語学習者数の多さの上にあぐらをかいてはいけなない。オーストラリアの日本語学習者像は、その学習者数から想像されるようなバラ色なものではなく、様々な問題を抱えている。日本語を「日本消費」の一環として学習する学習者が増えているということは、日本語学習という1つのカテゴリーが成熟してきたことの証拠であると言えるが、そこから一歩進んで、国際社会でオーストラリアに貢献していく「日本語人材」を十分に確保するためには、日本語教育に従事する我々が政策作成に関わる人たちと協力して Kretser and Spence-Brown (2010) や日豪会議の報告書から上がってきている提案を検討していかなければならない。政権交代で揺れ動く両国の政府が日豪会議の提案を忘れずに実行に移してくれることを願っているし、その方向に働きかけていかななくてはならないと思っている。

### 謝辞

本論で使ったデータの1部は、オーストラリア・リサーチ・カウンシルと国際交流基金の助成を受けている研究プロジェクトで得たものである。プロジェクトはキャシー・ジョナック氏、バーバラ・ノースウッド氏と共同で行ったことをここに記したい。

### 参考文献

Japan Foundation and Australia-Japan Research Centre (2004) *Directory of Japanese Studies in Australia and New Zealand*. Canberra: Australian National University.

11) 詳細は以下に。 <http://www.dfat.gov.au/geo/japan/ajc.html>

12) 全文は以下に。 <http://www.dfat.gov.au/geo/japan/strengthening-japanese-language-learning.pdf>

- Kretser, A. and R. Spence-Brown (2010) *The Current State of Japanese Language Education in Australian Schools*. Victoria : Education Services Australia.
- Liddicoat, A. J., A. Scarino, T. J. Curnow, M. Kohler, A. Scrimgeour, and A-M. Morgan (2007) *An Investigation of the State and Nature of Languages in Australian Schools*. Canberra : Department of Education, Employment and Workplace Relations.
- Lo Bianco, J. (2009) Return of the good times? Japanese teaching today. *Japanese Studies*. 29(3) : 332–336.
- Northwood, B. and C. K. Thomson (2010) Why stop studying Japanese? A case in Australia. In A. M. Stoke (Ed.), *JALT 2009 Conference Proceedings*. 820–832, Tokyo : JALT.
- Stevens, C. S. (2010) You are what you buy : Postmodern consumption and fandom of Japanese popular culture. *Japanese Studies*. 30(2) : 199–214.
- アンダーソン, ケント (2009) 「オーストラリアにおける日本研究の歴史」『をちこち (遠近)』 No.27 : 42–45.
- 国際交流基金 (2009) 「日本語教育国別情報 2009 年度国別一覧」 <http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/index.html> (2010 年 9 月 8 日アクセス)
- 自治体国際化協会 (2009) 「姉妹提携」 <http://www.jlge.org.au/JPN/duties/sistercity.html> (2010 年 9 月 8 日アクセス)
- 嶋津拓 (2008) 『オーストラリアにおける日本語教育の位置 – その 100 年の変遷』 凡人社